『そのとおりなのか』（使徒の働き 6 章 8 節-7 章 2 節、51-53 節）2023.8.27.

＜はじめに＞ 突然、問われたり責められたりする場面に立たされるとき、心中は穏やかではありません。しかし、主イエスはそのような時への備えと約束を与えてくださっています(ルカ 12:11-12)。本書の記者ルカは、前段で選ばれた 7 人の筆頭であるステパノの姿に焦点を向けています。

Ⅰ　論破と逮捕

①リベルテン会堂にて(6:8-10)

地中海沿岸の各地に奴隷となって散らされたユダヤ人が解放・帰還して、エルサレムでリベルテン(解放奴隷)の会堂に集っていました。ギリシア語に通じ、知恵と御霊によって語るステパノがイエスこそメシア(キリスト)と論じることに、彼らは対抗できません。

②偽りと扇動(6:11-13)

正攻法で対抗できない彼らは、言いがかりを浴びせてステパノを捕らえて最高法院へ連行します。人々をそそのかし、偽りの証人を立て、民衆と指導者を扇動して、奇襲逮捕して最高法院に立たせる手法と関わる面々は、主イエスの十字架の時とほぼ同じです。

③そのとおりなのか(6:14-7:1)

「ナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える」とのステパノの主張が、聖なる所と律法に反するのか、が訴えです。大祭司(カヤパ？)は「そのとおりなのか」と彼に問い、彼の長い答弁が始まります。彼の顔は神の栄光で輝きます。

Ⅱ　イスラエルの歩みを振り返る(7:2-47)

①アブラハムと族長たち(2-16)

神がユダヤ人の父祖アブラハムにメソポタミアで現れ、約束の地へ導かれます。そこを所有するのは彼の子孫が他国の地で寄留者・奴隷となった後だと約束されます。ヨセフが兄たちにエジプトに売られ、飢饉をきっかけに父ヤコブ一族もエジプトに寄留します。

②モーセ(17-35)

神は幼子モーセを救い出し、彼はエジプト王宮で成長します。40 歳の時、同胞を救おうとする彼の志は同胞から拒まれて、荒野へ逃亡・寄留します。80 歳の時、燃える炎の中に神の御声を聞き、アブラハムへの約束(6-7)の実現のために再び遣わされます。

③イスラエル民族(35-47)

モーセはイスラエルに生ける神のことばを語り、神の約束の地へ彼らを導こうとしますが、民は拒み、神は背く民を偶像に仕えるに任せます(42-43=アモス 5:25)。なおも神はモーセにより幕屋を、ダビデ・ソロモンにより神殿を建て、神礼拝の場を与え、今に至ります。

Ⅲ　歩みから導き出されること(7:48-53)

①神の御住まいはどこに(48-50)

イザヤ 66:1-2 を引用して、ステパノは神の宮の建物に固執することは神のみこころと合致しないと明示します。イスラエルの歴史には、神は異国にも現れ、語り、働かれている事実を列挙できます。会堂以外なら、私たちはどこに神を見出し、どこで神と語らいますか。

②いつも逆らっている(51-52)

モーセはイスラエルを「うなじを堅くする民」(出 32:9 他)「無割礼の心」(レビ 26:41)と称し、エレミヤは「耳に割礼がない」(6:10)と断じます。イスラエルの歴史で神への反逆と反抗が繰り返され、預言者たちを拒み、今やその子孫が正しい方イエスを拒み、殺したのです。

③人の心に潜むもの(53)

ステパノの論述は聖書と歴史に基づいていて、聞く者たちも肯定するほかありません。しかし理解がそれにふさわしい応答と行動に繋がらない矛盾を人は抱えています。一体それは何でしょう。ここまで聞いて、人はその矛盾と過ちを素直に認めるでしょうか。

＜おわりに＞ 「いつも」(51)は聖霊に逆らう人だけでなく、それでもなお働き掛ける聖霊にもかかっています。ここに神の忍耐とあわれみがあります。神に語られ、御声を聞けるチャンスが与えられている間に、その声に従う者に、神のあわれみと救いが届きます。(H.M.)